

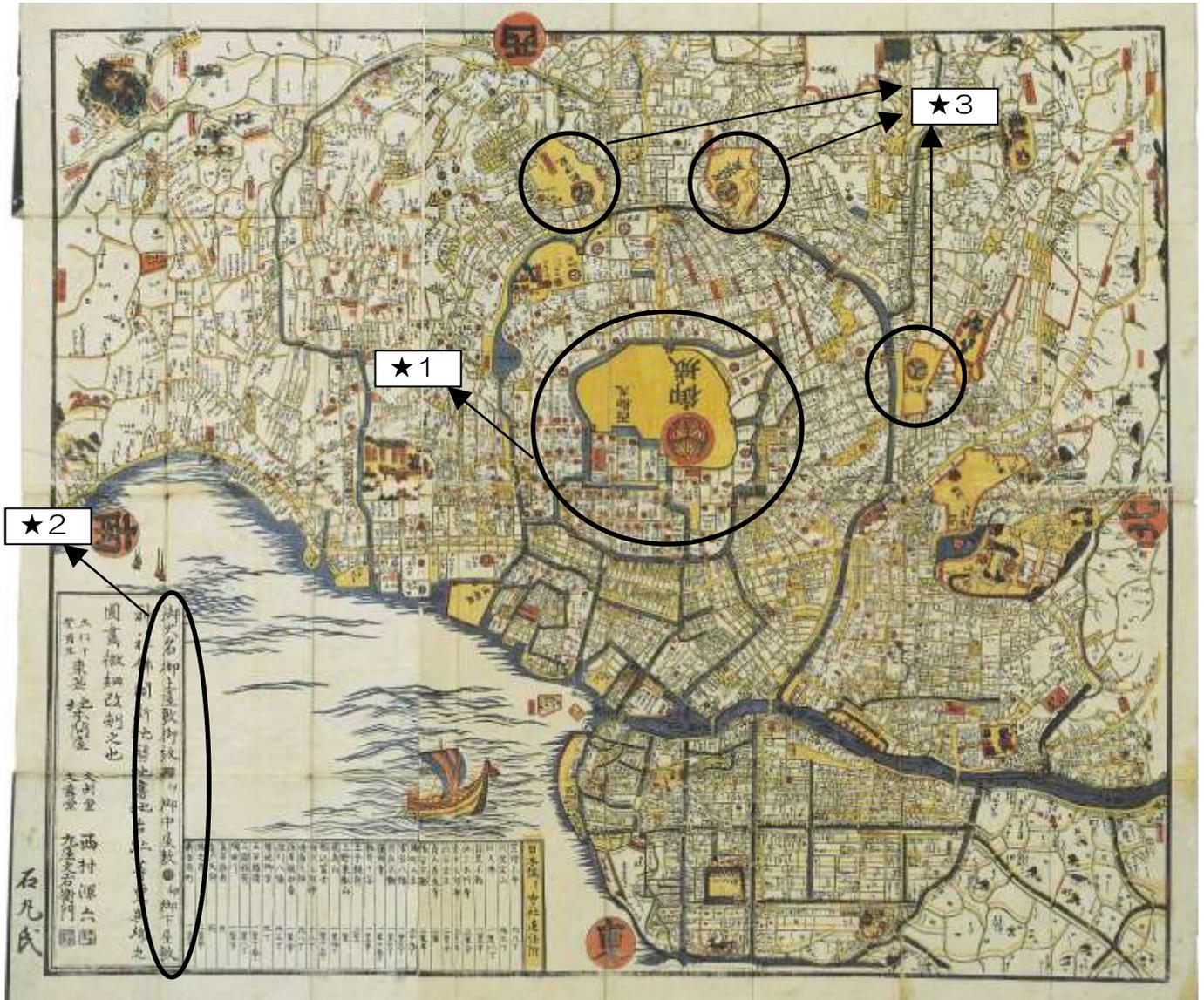
授業で使える当館所蔵地図

No. 66 『御江戸分見之図』

作成年：1813（文化10）年

サイズ：70×72cm

作者：西村源六・丸屋文右衛門（版）



【解説】

文化の中心が江戸に移り、庶民を担い手とした化政文化が栄えた文化文政時代に作成された本図では、江戸城を中心に江戸の市域が示されている。江戸時代には、武家地や寺社地には地名がなかったため、家紋や■・●記号を用いて大名屋敷を区別し、徳川御三家と呼ばれる、尾張、紀伊、水戸や道路は黄色で表している。また、現代のように地図の上を北にあてはめることがなく、どの方向からも文字が読めるように書かれていることから、四方のどこからでも地図を見ることができるよう工夫されていることも特徴である。

★1 江戸城

江戸城は現在の東京都千代田区に位置する。江戸城の別称としては江城、千代田城があるが、江戸時代に広く一般に用いられたのは江城であった。1457年、扇谷上杉氏の家臣である太田道灌が、享徳の乱に際して江戸城を築城した。1603年、徳川家康が江戸開府して以降、天下普請による江戸城の拡張に着手した。家康が江戸に入った時点での江戸城は石垣もなく、茅葺の小屋が100件ほどあるだけの場所だったと言われている。一連の天下普請により、本図のように総構周囲約4里と、日本最大の面積を誇る城となり、200年以上にわたり江戸幕府の中枢として機能した。

★2 武家屋敷

上屋敷 (家紋)	各藩が幕府から与えられた拝領屋敷のひとつ。各藩の政務の場であり、藩主とその妻子が暮らす屋敷。大名は在府中、定例の登城日や役職に定められた日など、しばしば江戸城に登城する必要があったため、通常は最も江戸城に近い屋敷が上屋敷となった。全国の大名が集まるため中屋敷、下屋敷に比べると敷地は狭くなる場合が多い。
中屋敷 (■印)	拝領屋敷のひとつで上屋敷の控えのような位置付けであり、隠居した前藩主や藩主の跡継ぎなどが暮らす屋敷。
下屋敷 (●印)	拝領屋敷のひとつで、主に大名の別荘のような扱いの屋敷。火災時や地震などの際には避難所として使われた。

一般的に大名は、江戸に上屋敷、中屋敷、下屋敷の三か所の屋敷を幕府から拝領していた。これらを総称して江戸藩邸と呼ぶ。すべての大名が上中下の屋敷を有したわけではなく、大名の規模によっては、中屋敷を持たない家や、上中屋敷の他に複数の下屋敷を有する家など様々であった。

江戸城の登城は江戸滞在時の重要な儀式であるため、大名及びその家族の居住地である上屋敷は主に江戸城に近い場所に配置されていた。反対に大藩の藩邸には将軍が直々に訪ねてくる御成りがしばしば行われ、将軍一行をもてなすために庭園や能舞台を造成、改築することを余儀なくされた。また、江戸藩邸は幕府と藩を繋ぐ政治的な窓口の役割も果たした。幕府からの連絡は藩邸に伝えられ、その後藩邸から本国へ伝えられた。一方、本国から幕府へ連絡する場合も、藩邸を経由して伝えられた。

★3 御三家の移転

明暦の大火後に、江戸の街は防災都市として大きく変貌を遂げた。徳川御三家の屋敷は、当初、江戸城本丸の吹上に建てられた。しかし、明暦の大火によって御三家の屋敷は焼失こそ免れるも、江戸の城下町全体は大きな被害を受けることになる。防災の観点からみると、限られた空間に屋敷を配置することは、郭内部の過密化を招き防災性が弱くなるという欠点が生じる。そこで、明暦の大火後は積極的に大名屋敷の郊外移転が図られた。それまで江戸城内にあった親藩の御三家の藩邸を城外に移転させ、跡地は吹上の庭として、馬場や薬園などを設け、延焼防止帯とした。尾張と紀伊の両徳川家は麴町に、水戸徳川家は小石川に屋敷地を拝領した。

【用語について】

・御三家

御三家は親藩のうちで最高位にあり、将軍家や御三卿とともに徳川姓を名乗ることや三つ葉葵の家紋使用が許された。将軍家を補佐する役目にあるとも言われているが、制度・役職として定められたものではなく、将軍家の後嗣が絶えた時に備え、家康が宗家存続のために遺したものが始まりであるとも言われる。

【利用の例】

○江戸幕府の支配の仕組みについて知ることができる。

→歴史的分野の「江戸幕府の成立と鎖国」において、江戸城の挿絵や江戸の城下町全体の様子から諸大名との関係を知ることができる。

参勤交代、御三家など

○江戸の繁栄が分かる。

→歴史的分野「産業の発達と幕府政治の動き」において、三都の一つとして発展した江戸の城下町の様子を知ることができる。

○明暦の大火の影響を知ることができる。

→明暦の大火後の江戸城下町の様子から、当時の防災（防火）対策を知ることができる。